

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ 「大阪市の学校選択制とその後」..... 1	● 授業デザインスキルアップ演習 2016 報告 3
● 2016 年度「教員免許状更新講習1・2」報告 2	● 授業の玉手箱 「学びの過程を可視化する工夫」..... 4
講習1：アクティブ・ラーニングとは何か、英語授業での方略 2	● 書籍紹介 『アクティブ・ラーニングを考える』..... 4
講習2：いきさとした英語指導の工夫（発音・発話タスク・発問）..... 2	● 第 46 回・47 回・48 回勉強会案内・編集後記 4

巻頭エッセイ

大阪市の学校選択制とその後

中垣 芳隆

去る6月の読売新聞夕刊に「市立中案内に進学実績」「学校ごとに高校名や人数」「序列化懸念の声も」といささかセンセーショナルな記事が出ていた。

この内容を少し詳しく記すと以下のようであるらしい。

大阪市立中学校で、学校選択制の参考資料として次年度中学校入学予定児童と保護者に配布される「学校案内」冊子に、各中学校ごとの卒業生の進学高校名など進学実績が記載されることが、8月下旬までに決まった。

大阪市教委は、当初は消極的な姿勢を示す意見が大半だったものの、吉村洋文大阪市長が積極姿勢を強調したこともあり、全区で掲載することが決まり、17区で進学先高校名と人数を記載し、残る6区では高校名のみ記載して人数掲載は見送った。

その狙いは学校選択制の参考資料としてということらしいが、2003年に、規制改革の一環として学校教育法施行令を改正して全国的に導入された学校選択制も、近年では、地域と学校の関係の希薄化や、通学時の安全、児童生徒数の偏りなどを理由に、都内3区のほか、多摩市、前橋市、長崎市などで制度を見直し、原則、学区の学校に就学するよう改められるなど、修正が加えられている。

大阪市における学校選択制については、事前の住民説明会では強い反対の意見や懸念の意見が出るなどし、会場アンケートの集計ではどの会場でも反対や疑問の声が多数を占め、また有識者や市民代表などを委員に加えた諮問機関でも導入には慎重な意見が出されたものの、橋下前市長の主導の下で2014年度に導入された経緯があると仄聞するところであり、2015年4月に大阪市が実施した「学校選択制実施区における保護者アンケート」の結果によると、およそ94%が校区の学校に通学しており、学校選択制の利用は4.8%にとどまっている。

今回の「学校案内」冊子に、各中学校ごとの卒業生の進学高校名など進学実績を記載することは、学校選択制を後押しすることに狙いがあるようだが、情報公開の一環として進学

高校名を掲載することはともかく、人数まで記載する必要があるのかといささか疑問に思われる。

従前の全国学力テストの学校平均点や全国体力テストの学校平均値の公表に加えて、進学先高校の人数をあげるとなると、学力を「テストの平均点」と同一視しての一方的な競争がさらに進むおそれがあるのではないかと。中学校が進学実績を伸ばす競争の中に位置づけられていけば、学校の教育内容は受験対策になお一層引っ張られることになる。

大多数の学校現場の教員は、「学校は塾ではない」という矜持を持って子どもを指導している。一人ひとりの学力を上げるということをゴールに置きつつも、単にテストでの点数ではなく、授業の中で、子どもに発見や気づきを与え、学習意欲を高め、クラスの仲間との対話や協働の場をつくることで子ども同士の人間関係を築き、あるいは、保護者や地域社会と連携しながら、子どもたちの社会性や道徳性を高める取り組みを通して、総合的な人間の成長を図っている。

生徒・教職員を「テストの点数」や「進学先高校」という極めて一方的な尺度で評価して競争させることは、教員や子どもから、じっくりと多様な学習活動や行事に取り組む余裕を失わせ、学力だけでなく社会性や道徳的資質などを全体的に伸ばそうとする豊かな学びから、遠のかせることになるのではないかと。

我が国の教育の先達の一人である大村はま先生の最後の詩「優劣のかなたに」の一節が頭をよぎる。

成績をつけなければ、合格者をきめなければ、
それはそうだとし、それだけの世界。
教師も子どもも 優劣のなかであえいでいる。

学びひたり 教えひたろう 優劣のかなたで。

ともあれ、大阪市は周囲に相当な影響力をもつ大都市であるが、こうした動きが他の自治体、とりわけ大阪府内の市町村に拡大しないことが望まれる。